様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３３７０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５３０７８５

研究課題名（和文）社会的エージェント資源モデルの構築に向けた総合的研究

研究課題名（英文）The research aiming at the establishment of the agent resource model of socialization.

研究代表者
吉田　俊和（YOSHIDA, TOSHIKAZU）

岐阜聖徳学園大学・教育学部・教授

研究者番号：７０１３１２１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、家庭、友人・仲間集団、近隣住民、学校など、青少年の社会化に寄与する環境要因の多層的な影響を明確化した。各要因を社会化のエージェントとみなし、各エージェントの個別の寄与と、それぞれが相互作用することにより社会化に及ぼす影響を明らかにした。一連の結果から、エージェントの包括的影響が個々の影響より強いことが明らかにされた。これらの知見は、社会化エージェント資源モデルにの提唱に結実した。

研究成果の概要（英文）：This project clarified multiple environmental influences such as families, friends, neighborhoods and schools on socialization of youths. We considered these environmental influences as socialization agents, and revealed individual and interactive influence from these agents on socialization. The results implied that comprehensive impact of these agents had more predictive power to adaptive socialization of youths than individual impacts had. These findings advocate the new theoretical model, which is the agent resource model of socialization.

研究分野：社会心理学・教育心理学

キーワード：社会化エージェント　資源モデル　集合的有能感　反社会的行動　向社会的行動　親の養育態度　地域交流　教師の指導法

１．研究開始当初の背景

近年の少年非行の特徴として、社会的認知能力や自己制御能力を中心とした社会性の欠落が問題視されるようになってきた。こうした子どもの問題行動の原因は、子どもを取り巻く環境ネットワークが有する社会化能力の弱体化に還元することが可能である。

筆者らは、本プロジェクトを開始するまでに、社会的情報処理の誤りや歪み、利己的な行動をコントロールする際の自己制御能力の低下が、反社会的行動や社会的迷惑行為を予測する上で有効な予測因であることを確認し（原田・吉澤・吉田, 2008 ; 吉澤・吉田,2010)、こうした社会化を反映する能力や機能が、家庭や学校などの近接的要因だけでなく、社会システムや社会環境などの遠隔的要因も含めた多層的な環境要因の影響を明らかにしてきた。学校における仲間集団との相互作用のなかで逸脱的な社会的情報処理傾向が強まること（朴ら, 2012)、地域社会の集合的有能感や地域住民との交流が子どもの望ましい社会化を促進すること（吉田, 2010 ; 吉澤他,2009）を実証した。

これらの研究は、子どもの問題行動の背景要因としての社会性に対し、近接要因から遠隔要因に至る多層的な環境要因が影響するメカニズムを明確にしたという点で、一定の成果を得ている。しかし、個々の環境要因だけではなく、複数の要因の包括的影響が子どもの社会化にどう影響するのかという視点が欠落していた。すなわち、特定の環境要因が子どもの望ましい社会化を促すうえで十分に機能していなかったとしても、他の環境要因が補完的に同様の機能を果たすのであれば、社会化の失敗には繋がらないことが予測される。

２．研究の目的

本研究は、親(家庭)・友人(仲間集団)、地域(近隣住民)、学校(教師)など、青少年の社会化に寄与する環境要因の多層的な影響を明確化することを第一の目的とする。各要因を社会化のエージェントとみなし、各エージェントの個別の寄与と、それぞれが相互作用することにより、社会化に及ぼす影響を明確化する。第二に、社会化のエージェントは望ましい社会化に向けて影響を及ぼす効果的資源をそれぞれ個別に有するとみなし、互いがそれらの資源を補完するだけでなく、一人の社会化の主体を取り巻く全エージェントの包括的な資源が、主体の社会化の成否を決定づけるとする社会化資源エージェントモデルの提唱に向けた研究知見の蓄積を目的とする。

３．研究の方法

最初の研究は、G 県内の 2 つの私立大学生 558 名を対象に調査を行った。小中学校時代を回顧してもらい、以下の項目を 2 回に分けて質問した。小学校低学年時の親の養育態度（応答性と統制、しつけ尺度）中学生時の友人関係機能（信頼、凝集性、受容、自己成長)、地域住民の集合的有能感・地域交流（小中学校時)、教師のリーダーシップ（中学校時)、社会的情報処理の適切性、認知的歪曲、一般的攻撃信念、社会的逸脱行動（高校生時の経験)。なお、学生の保護者に対しても、養育態度（小学校低学年時）と、地域の集合的有能感について評定してもらって回収した。

2 年目の 1 月から 3 年間、A 県内の公立中学１校を対象に、初年次は、1,2,3 年生データ（各学年 200 名程度)、2 年次は、学年の持ち上がりで 2,3 年生データ、3 年次は、3 年生のデータを採取した。質問項目は、大学生対象の調査に準ずるが、教師・保護者・地域住民のデータ採取にも、協力を得られた。中学生の場合には、内容を 3 回の調査に分散して回答してもらった。

４．研究成果

4 年間のうち、最初の 2 年間は、大学生とその親を対象とした小学校時の回顧データで社会化領域との関連をみたところ、(1)子どもと地域住民との交流が社会化指標（社会的情報処理・社会的自己制御など）を媒介して社会的逸脱行為を抑制するのではないかとの仮説を検証した。地域住民の公的交流は、集合的有能感の非公式社会的統制を通じて社会的情報処理に影響し、そこから社会的自己制御を介して社会的逸脱行為を抑制するというモデルが確認された。(2) 親の養育、友人関係機能、地域住民の集合的有能感、教師のリーダーシップを説明変数、社会的情報処理、社会的逸脱行為（高校生時）を基準変数とした重回帰分析を行った結果、親の応答性や友人の受容(protection)領域は、情報処理のバイアスに抑制的に機能する。さらに、養育の統制などの control 領域にも同様の機能が見出された。(3)親の躾、地域住民との私的交流、教師の熱心な指導は、学び(good learning) 領域に該当し、規範意識の向上に寄与している。一方、逸脱行為経験は地域住民からの control を受けており、行動レベルの行動抑制には、よりマクロな環境からの働きかけの有効性が示された。(4)社会化エージェントの相互補完的機能の明確化に関する分析結果では、仲間集団から適切な働きかけを得ていないとき、家族ネットワークの豊富さは情報処理バイアスを緩衝する一方で、近隣ネットワークの豊富さは、そうしたバイアスを強化する。すなわち、友人関係機能を低く認知している子どもは、反社会的な近隣住民と関わりやすい可能性がある。(5) 親の養育・しつけの社会的情報処理への影響は、地域住民の集合的有能感や地域交流が有効に機能している場合に限られることが示された。(6) 親と教師の社会化に機能を Grusec & Davidov(2010)が提唱する 5 つの社会化領域に対応させた上で、両者の補完性を検討した。具体的には、社会領域 protection における親の受容と教師の親近・配慮の相互補完性、社会化領域 control における親の統制と教師の

厳しさの相互補完性を検討するため、社会的自己制御の自己主張と自己抑制を従属変数として階層的重回帰分析を行った。その結果、親と教師のいずれかの社会化機能が低くても、自己抑制が身につくことが示され、相互補完性が示唆された。
このほか、従来からの一連研究で、論文が 2 本掲載された。一つ目は、社会化指標（社会的自己制御）と規範逸脱行為との関係に関する国際比較では、日本では、自己抑制が低く自己主張が高い「主張型」が逸脱行為を行いやすいのに対し、韓国・中国・アメリカでは、自己抑制だけが規範逸脱行為と関連していた。二つ目は、地域防災に関するもので、地域住民の関与性と住民雰囲気が集合的有能感の醸成に役立ち、地域防災行動に繋がることが考察された。
研究開始 2 年目から中学校でも縦断データを収集した結果、(7) エージェント指標（親の養育態度・友人関係機能・教師のリーダーシップ）から、向社会性と反社会性に関する多数の社会化指標に対する影響を重回帰分析したところ、友人関係機能の影響が強いことが示された。(8)規範逸脱行為と親和性の高い自己制御を取り上げ、親・友人・教師エージェント指標を説明変数、自己制御の 3 下位因子を基準変数として、多母集団同時分析を行ったところ、エージェントとしての親の影響は、中学校 1 年生のみで、教師や友人による影響は 2 年生や 3 年生にもみられた。(9) 養育認知と居住地の移動との交互作用効果が、中学生の反社会性(一般攻撃信念、認知的歪曲)と向社会性(共感的関心・視点取得)に与える影響について検討したところ、居住地の移動は、情動に関わる社会化指標(一般攻撃信念・共感的関心）に対する養育認知の効果を弱めている。(10) 子どもの社会化にとって重要な要素である視点取得に着目し、友人関係機能と教師のリーダーシップとの交互作用的効果について検討したところ、友人関係が機能していない中学生の学校生活や学習場面に対して、教心が配慮することによって、子どもの視点取得が阻害されるというエージェント間の相乗的影響が認められた。 (11) 中学生と大学生のデータを比較し、発達段階によって養育者認知に差があるか、および親と子の養育認知の共有について検討した。結果は、中学生時の受容や統制より、大学生時の方が高く、親子間の養育認知の共有は、中学生の方が大学生よりも高かったが、いずれの発達段階でも弱い相関であった。(12) 親子のペアデータは、養育者が社会化エージェントとして受容 や統制 (control) 機能を発揮し、子どもがそれを内在化することで、子どもの共感性や社会的情報処理といった社会化が達成されるという媒介過程が確認された。(13) 担任教師 22 名の指導スタイルを分類し、生徒の社会化指標に及ぼす影響を多面的に検討した。教師自身のリーダーシップ評定(配慮・厳しさ・指導・親近性）から、クラスター分析により、厳しさ優先群／高リーダーシップ群／非親近的指導群／親近的指導群の 4 群に分け、向社会性(共感的関心・他者視点取得・自己主張・自己抑制）と反社会性（認知的歪曲・一般攻撃信念・ルール適切性）を比較した。結果は、すべての指標でクラスター間に有意な差はみられなかった。(14)子どもの社会化に関わる機能を有する資源(親の養育態度、地域住民の関与性、友人関係、教師のリーダーシップなど)から、潜在クラスを構成し、子どもの向社会性や反社会性への影響を比較した。その結果、全エージェントの資源が高い得点の潜在クラスは、向社会性指標（自己他者モニタリングスキル、共感性、自己制御など）得点が高く、反社会性指標（認知的歪曲、一般的攻撃信念、ルール適切性など）の得点が低かった。

＜引用文献＞

① 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和、社会的自己制御尺度の作成、パーソナリティ研究、17 巻、2008、82－94
② 朴賢晶・尾関美喜・中島誠・吉澤寛之・原田知佳・吉田俊和、地域社会が中学生の問題行動に及ぼす影響－規範意識の低下が引き起こす学校の荒れに着目した検討－、犯罪心理学研究、49 巻、2012、39－50
③ 吉田俊和、社会環境が反社会的行動の生起に及ぼす影響－社会的情報処理と情動制御による媒介モデルの検討－、季刊『社会安全』No.76、2010、27－36
④ 吉澤寛之・吉田俊和、中高校生における親友・仲間集団との反社会性の相互影響－社会的情報処理モデルに基づく検討－、実験社会心理学研究、50 巻、2010、103－116
⑤ 吉澤寛之・吉田俊和、社会環境が反社会的行動に及ぼす影響－社会化と日常活動による媒介モデル－、心理学研究、80 巻、2009、33－41

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　４件）

① 浅野良輔・吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・玉井颯一・吉田俊和、養育者の養育態度が青年の養育認知を介して社会化に与える影響、心理学研究、2016（印刷中）（査読有り）
② Yoshizawa,T.,Yoshida,T.,Park,H.,Nakajima,M.,Ozeki,M.,& Harada,C. 、Neighborhood interaction factors versus social compositions in predicting youth socialization development- An international research-、Japanese Journal of Applied Psychology、Vol.42, 2016、(in press)

（査読有り）

③ 原田知佳・吉澤寛之・朴賢晶・中島誠・尾関美喜・吉田俊和　日・韓・中・米における社会的自己制御と逸脱行為との関係、パーソナリティ研究、22 巻、2014、273－276（査読有り）

④ 吉澤寛之・吉田俊和・中島誠・吉田琢哉・尾関美喜・原田知佳、地域防災に寄与する集合的有能感の醸成－マルチレベルを用いた検討－、東海心理学研究、8 巻、2014、12－19（査読有り）

〔学会発表〕（計 17 件）

① 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（16）－中学生を対象としたエージェント潜在クラス間の反社会性の比較、日本心理学会第 79 回大会、2015 年 9 月 22 日（名古屋国際会議場）

② 玉井颯一・吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（15）－教師評定による指導スタイルと子どもの社会化指標との関連－、日本教育心理学会第 57 回総会、2015 年 8 月 27 日（新潟コンベンションセンター）

③ 浅野良輔・吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（14）－養育態度と社会性に関する中学生の親子ペアデータを用いた検討－、日本教育心理学会第 57 回総会、2015 年 8 月 27 日（新潟コンベンションセンター）

④ 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（13）－中学生を対象としたエージェント潜在クラス間の向社会性の比較－、日本教育心理学会第 57 回総会、2015 年８月 27 日（新潟コンベンションセンター）

⑤ 吉田琢哉・吉澤寛之・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（12）－中学生と大学生の各親子が認知する養育の差異－、日本教育心理学会第 57 回総会、2015 年 8 月 27 日（新潟コンベンションセンター）

⑥ 玉井颯一・吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（11）－友人関係と教師のエージェント機能における交互作用的影響の検討－、日本教育心理学会第 56 回総会、2014 年 11 月 7 日（神戸国際会議場）

⑦ 浅野良輔・吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（10）－養育認知と居住地の移動が中学生の社会化に与える影響－、日本教育心理学会第 56 回総会、2014 年 11 月 7 日（神戸国際会議場）

⑧ 原田知佳・吉澤寛之・吉田琢哉・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（9）－中学 3 年間における親・友人・教師エージェントが自己制御に及ぼす影響の変化－、日本教育心理学会第 56 回総会、2014 年 11 月 7 日（神戸国際会議場）

⑨ 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（8）－親・友人・教師エージェントが中学生時の適応的・不適応的社会化指標に及ぼす個別的影響－、日本教育心理学会第 56 回総会、2014 年 11 月 7 日（神戸国際会議場）

⑩ 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（7）－親・友人・教師エージェントが中学生時の社会化潜在指標に及ぼす影響－、日本心理学会第 78 回大会、2014 年 9 月 12 日（同志社大学）

⑪ 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（6）－潜在プロフィール分析を用いたエージェントクラス間の反社会性の比較－、日本社会心理学会第 55 回大会、2014 年 7 月 26 日（北海道大学）

⑫ 浅野良輔・吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（5）－養育態度と社会的情報処理の関連をめぐる親子ペアデータを用いた検討－、日本社会心理学会第 55 回大会、2014 年 7 月 26 日（北海道大学）

⑬ 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（4）－親・地域住民が子どもの社会的情報処理に与える相乗的・相互補完的影響－、日本社会心理学会第 54 回大会、2013 年 11 月 3 日（沖縄国際大学）

⑭ 浅野良輔・吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（3）－友人関係機能と家族・近隣ネットワークの調整効果－、日本教育心理学会第 55 回総会、2013 年 8 月 18 日(法政大学)

⑮ 原田知佳・吉澤寛之・吉田琢哉・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（2）－親と教師による相互補完的役割に着目して－、日本教育心理学会第 55 回総会、2013 年 8 月 18 日(法政大学)

⑯ 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和、社会化エージェントの多層的影響に関する研究（1）－

親・友人・地域住民・教師の各エージェントが社会的情報処理に及ぼす影響―、日本教育心理学会第55回総会、2013年8月18日(法政大学)

⑰ 吉田琢哉・吉澤寛之・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和、地域住民との交流が反社会的態度の抑制に及ぼす影響―大学生の回想データから―、東海心理学会第62回大会、2013年6月1日(静岡大学)

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
吉田　俊和（ YOSHIDA, Toshikazu ）
岐阜聖徳学園大学教育学部・教授
研究者番号：70131216

(2)研究分担者
吉澤　寛之（ YOSHIZAWA, Hiroyuki）
岐阜大学教育学研究科（教職大学院）・准教授
研究者番号： 70449453

(3)連携研究者
吉田　琢哉（ YOSHIDA, Takuya ）
岐阜聖徳学園大学教育学部・准教授
研究者番号：70582790

(4)連携研究者
原田　知佳（ HARADA, Chika）
名城大学人間学部・助教
研究者番号：00632267
(5)連携研究者
浅野　良輔(ASANO Ryosuke)
浜松医科大学子どものこころの発達研究センター・特任助教